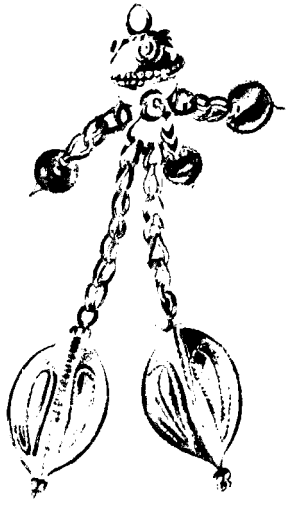
難波の女人



岡部伊都子

講談社

難波の女人

昭和四十八年三月八日　第一刷発行

定価　六〇〇円

著者　岡部伊都子

発行者　野間省一

発行所　株式会社講談社

東京都文京区音羽二ノ一二ノ二一
〒一一二　電話　東京（〇三）九四五一一一一一　振替東京三九三〇

印刷所　東洋印刷株式会社

製本所　株式会社国宝社

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします
©岡部伊都子　一九七三　Printed in Japan

0095-301365-2253（0）　（文2）

難波の女人　目次

磐之媛皇后　8
間人皇后　28
防人と女人　46
「君なくて」の君　64
明石の上　82
狐　葛の葉　100

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

江口の遊君　118
細川ガラシャ夫人　136
樽屋おせん　154
紙屋おさん　172
緒方八重夫人　190
鵙屋春琴　208
あとがき　225

装幀　山田和子

難波(なにわ)の女人(にょにん)

磐之媛皇后

はじめに

『古事記』『日本書紀』はまず、天地開闢・国生みの神話からはじまる。『記』に重点をおいてみよう。

「阿那邇夜志愛袁登売袁」と伊邪那岐命。

「阿那邇夜志愛袁登古袁」と伊邪那美命。

そして淡路島、四国、九州、壱岐、対馬、佐渡、大倭豊秋津島（大和を中心にした豊かな地域）などを生んだとされている。大八島国の由来である。ひきつづいて吉備の児島、小豆島、大島、女島、知訶島、両児島などを生みつづけたという。それが今の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

土地としてどこに当るかは、いろいろ議論のわかれるところだ。いずれにしても国生み神話は、古代の人びとの心に描かれた夢であり、連想であった。

さきに『女人の京』『やまとの女人』をとりあげたわたくしは、今度は是非、難波の里の女人をとりあげたいと考えていた。京とか大和とかに、多くの人の関心は奪われている。たしかに大和には、古代の面影をしのぶことができる風物がある。京にも千年の都の歴史の層が分厚く感じられる。きめ細やかな自然と、人工の美しさがやさしく匂う、京や大和に人の心がさそわれ易いのは当然のことだ。しかしたしかに「記・紀」が編纂された時代は奈良時代であったし、その後の歴史は京を中心に展開されることが長かったけれど、その文字化された日本文学の国生み神話の舞台は、難波津からの発想ではなかっただろうかと思う。

瀬戸内海の起点終点としての難波。大和へも京へも、まず難波津を出発地とする地理。『古代王権の祭祀と神話』(岡田精司著)で特に興味深く思われたのは〝八十嶋祭〟の話であった。〝八十嶋祭〟というのは、平安朝以前に天皇即位礼の一環として大嘗祭の翌年に難波津において行われた祭だったという。

「勅使が天皇の『御衣』を納めた箱を持って難波津に下向し、海に向かって『御衣宮』を開いて、和琴の音とともにそれを振り動かす儀礼」は、即位した帝の衣に八十島の神々の力をよりつけ、その威霊を身につける祈念の儀式なのだ。この、儀礼の内容と意味するこころを思う時、大阪の位置、大阪の風土は、日本にとって扇の要(かなめ)のような原点として、とらえ直さずにはいられないものがある。

戦災で炎上した大阪の町は、いまは戦前の姿をあらかた失った。大阪の都心にうまれた者でありながら、わたしは〝ふるさと〟大阪に〝ふるさと〟を味わうことがすくない。戦前の、今から思えば清らかな空気の大阪でさえ「煙の都」とおびえて、虚弱のからだを転地で養ってきたわたしだった。その上、戦後わが家は破産した。もはや、なつかしい横堀川は埋められて高速道路となり、光化学スモッグにおびえて、運動会さえ天候状態をうかがわねばならぬ現状である。経済面からも自然環境面からも、とうてい住めるふるさとではない。その上、いわゆるど根性とか、がめつい奴とか、なんだか、いやしめ歪められた大阪のイメージが、いまの大阪にかぶせられてしまった。

また、〝ふるさと〟意識は差別に使われることが多いので、わたしは〝ふるさと〟意

識を嫌ってきた。大阪出生ということよりも「いかなる者として生きるか」が大切なものと思われた。「人類の一員」「生物仲間の一員」その一員意識で生きようと努力した。だが、沖縄へわたったわたしは、沖縄に濃厚に熱い〝人間のふるさと〟を感じた。そしておそろしい不幸のゆえにのこり得たこの〝ふるさと〟から、「お前はいかなる人間でいるのか」と問われて息をのんだ。繁栄する大都会、商魂あふれる経済都市大阪という文明化のなかで……わたしの大阪がいかに美しいものを歪められてきたか、人間にとって、土着の思想にとって大切なものを、見失わされてきたか……。その時はじめて、大阪のかなしさに胸が迫った。わたし自身が、人間の土着の熱い心を失っていたのであった。その、新しい視点であらためて大阪を見直すとき、神がうまれ、神がよりつき、国生みの思想を培った難波が蘇ってきた。この難波にゆかりをもつ先祖の女人像を、探らねばいられなくなったのである。

「天皇になってからもう六年も経った。天皇に皇后がいないのはよくない。天下の政

治も、天皇ひとりがみるものではなく、後の政もあるのだから、皇太子の母としての藤原夫人を皇后と決めた。この女人を祖母元明天皇がわたしに下さった時『このひとの父大臣（不比等）は朝廷のために真心で供奉する功臣顕臣だから、罪がなかったらどうか大切にして下さいよ』といわれた。六年の間、みてきたがやはりすばらしい女人だ。皇后とすることに決める」

天平元年、聖武天皇は、藤原夫人光明子を皇后にすることを宣した。美貌で賢明で才高き女人光明子は、藤原一家のホープであった。ところがやっと生んだ皇子をすぐ皇太子としたのに、その皇子は一年ほどで死んでしまった。光明子には阿倍皇女（のちの孝謙、称徳帝）がいるだけである。他の夫人に安積（あさか）皇子ができたこともあって、藤原家はひどくあせる。

当時高市皇子の子の長屋王は、英明で筋を通した皇族左大臣であった。後宮の規定では夫人でしかあり得ない光明子を皇后としあげるため、邪魔になる長屋王にいいがかりをつけた。王は自尽させられてしまった。そのため、心中に反藤原の意を持つ者も口をつぐんでしまう。皇族出身でない女人が皇后になるのは、考えられない時代だ

った。それだけに聖武天皇はその宣命のなかで遠い先祖の話をもちだして、諸王衆臣に納得させようと努力している。『続日本紀』の宣命には生の声がきこえてくるような面白さがある。

「皇族以外の女人を皇后にすることはわたしの時だけではない。難波の高津宮に天の下しろしめしていた大鷦鷯天皇（仁徳）は葛城曽豆比古の女子、伊波乃比売命を皇后として政治を行っていた」と。

戦前の小学校の国語や国史の教育で、大阪と仁徳帝との関係はたびたび語られた。高津宮に住んでいた仁徳帝は高台から活気のない集落をみて心をいためた。三年の間、宮がぼろぼろになるのもかまわずに税を免じたので、やがてどの家からも賑かに炊事をする煙がたつようになった。民が富むことこそ、わが富であるという天皇の徳を慕って、民衆が競って宮居を作った。そういう仁慈の帝がこの大阪を都としていたということであった。

現在仁徳陵とされている古墳は、全長四八五メートル、その規模壮麗の造営である。延百八十万人の労働力が必要だそうだから当時の権力者が民衆を使う力には巨大なものがあったようだ。またそれは、民衆自身のエネルギーが大きいことをも示している。「記・紀」の記述には中国聖帝のイメージや、悪帝の言行がよく翻案されているようなので、直ちにそのままを信じることはできない。ここでは『紀』の用語を用いて『記』の記述も引用することにする。物語として読む限り、この天皇には、甚だ多くの女人の苦労があった。

父応神天皇が日向の国から徴(め)した髪長媛をみてその美しさにいたく心を奪われた。その様子を知った父帝は、髪長媛を大鷦鷯皇子に与える。容貌うるわしときこえた女人を遠い国々から徴したり、また、地方豪族が自己の利益や保身のために献じたりしたのであろう。一夜の伽に終る女人も数知れないはずだ。

大鷦鷯皇子は、葛城氏の実力者襲津彦(そつひこ)の娘磐之媛を妻にした。葛城地方の豪族の娘との結婚は、天皇家の支配者としての力を支えるための政略結婚であることがよくわかる。そのためかどうか、天皇はひどく皇后の顔色をうかがい、他の女人との交渉に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.